

市民とともに考える公園づくり 公園がまちを変える一宮塚公園

兵庫県芦屋市

コミュニティ・マネジメント及び公園リニューアル設計=株式会社ヘッズ大阪

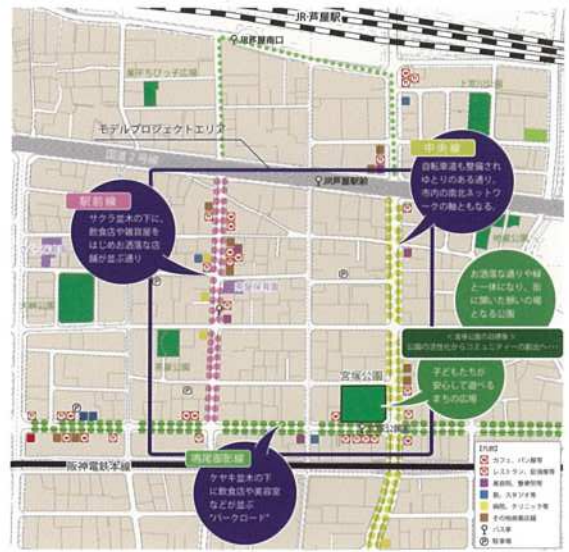
写真・資料・文=株式会社ヘッズ大阪

Citizens and municipalities consider parking together.
And the park enhances the appeal of the city. — Miyazuka Park

Ashiya city, Hyogo.

Town management and park design by HEADS CO.,LTD.

Photo, documents and text by HEADS CO.,LTD.



まちのブランディングソースとしての公園

本プロジェクトの対象地である宮塚公園とその周辺エリアは、JR芦屋駅と阪神電鉄芦屋駅間の市中央部、ケヤキ並木が美しい市道鳴尾御影線、桜並木の下にお洒落な店舗が並ぶ駅前線、市の南北軸でもある中央線に囲まれたエリアに位置する。近年カフェ・レストランや雑貨店などの洗練された店舗が集積しつつある芦屋市を代表するお洒落なエリアであり、旧宮塚町住宅などの文化資源も点在することから、芦屋市としても宮塚公園の利活用促進のほかにも多様な取り組みを予定し、更なる賑わいなどの新たな価値創出を図るブランディングエリアとして位置づけている。本プロジェクトは、ハード整備の規模としては小さな街区公園のリニューアルを、都市政策におけるブランド化の中にブランディングソースとして位置づけ、公園のリ・デザインとコミュニティ・マネジメントを両輪で進めることによって、公園からまちのブランディングに取り組んだものである。



地域特性にあわせた、協働による公園づくり

芦屋市では、今後の都市公園等の公園整備や利用に関する課題を整理し、芦屋市のまちの魅力や価値を高めることにつながる都市公園整備利用のあり方について検討し、「都市公園整備利用基本方針」の策定も進めているところである。

市では公園の価値を最大限に高め、地域毎の特性にあわせてそれを実現していくためのモデルを示すことができる実効性のある計画づくりが大事であると考え、市内のいくつかの公園で実際にモデル的にプロジェクトを動かし市域に広げ

ていくことを検討する中で、宮塚公園を「市民とともに考える公園づくり」「地域特性にあわせた協働による公園づくり」の可能性を探るモデルプロジェクトとして位置づけることとなった。

宮塚公園は、前述のような中心的な立地にあるものの、石積みと低木により通りと空間が遮断され、まちとの関係性が希薄であるという課題を抱えていた。

モデルプロジェクトとして、コミュニティー拠点として使いやすくお洒落な公園像を市民とともに考え意見交換をする

場を、公園を豊かに使っていくためのプラットフォーム設立に繋げるというロードマップを描き、プロジェクトがスタートした。

プロジェクトの過程は、芦屋市全体の公園を考えるプラットフォームである「市民プロジェクトミーティング」にて報告し、市域全体で捉えた意見や、子育て・福祉など関係各課の視点からの意見も受けながら進めてきた。

■プロジェクトのプロセス

a) 目標共有 ~エリアの活性化に向けて、みんなで公園を考える~

○まず公園が位置する宮塚町、隣接する茶屋之町の2自治会へのヒアリングを行い、合同で意見交換の場を持つことを相談し、「(仮称)セントラルゾーン意見交換会」を立ち上げた。

○第1回目の意見交換会ではエリアとして公園を捉え、宮塚公園の立地や周辺地域の繋がりを再認識。また、それぞれの立場から日頃感じている「課題」やリニューアルへの「期待」を共有し、自治会の枠を超え地域で一緒に考えていくという道のりのスタートを切った。

b) 市民目線でのプランづくり~アイデア1つに…合意形成~

○意見交換会には、同じ地域でも多様な立場の参加者が存在し、子ども、子どもを連れた親、高齢者、近隣店舗、地域の活動団体など…多様な目線での意見が集まったことは大きな収穫だった。

○アイデアは、一度すべてテーブルに乗せ、今回実現するもの、長期的に取り組むもの、市と地域と一緒にこれから取り組んでいくもの、などを少しずつ整理していった。今回全て実現しなくても、地域と市とで一緒に考える継続的なまちづくりへと話を繋げた。

○図面やスケッチで使い方のイメージを確認しながらの意見交換を繰り返し、1つのプランで合意形成することができた。

c) 学識を交えた勉強会 ~評価してもらうことで価値を認識~

○意見交換会は、市と自治会だけで行うのではなく、各プロセスにおいて専門家を招いたり、先述の「市民プロジェクトミーティング」に経過を報告しながら柔軟に運営した。

○特に、兵庫県立大学の赤澤先生、福本先生、大平先生から、世界の公園利用の潮流や関西圏ので実践事例などを紹介いただく中で、宮

塚公園の取り組みが持つ意味を評価していただき、本プロジェクトの価値をみんなで共有できたことは、大きな推進力となった。

d) 意見交換から新しい公園利用の実践へ…

○プランが完成すると、マナーや管理、運営面などの心配事も出てきたが、「まずはやってみることが大事」と話し、試行としてリニューアルイベントを行うことになり、企画をはじめのタイミングで、プランを考えてきた意見交換会を、地域でどのようにに活用していくかを考え実行する「宮塚公園活性化実行委員会」と改めた。

○リニューアルイベントという具体的な舞台を設定して出展を募ると、近隣の飲食店や公園のすぐ近くを拠点に活動する合唱団などの新しいプレイヤーが現れ、公園への潜在的なニーズを確認できた。

○当日は、高校生の吹奏楽や書道パフォーマンスに始まり、文化プログラムが次々行われた。中でも合唱団のミュージカルは圧巻で、「街角ミュージカル」という新しい公園利用が生まれた。また、近隣のカフェなどによるマルシェのにぎわいは、まちにしみ出した。

e) 継続・発展するプラットフォームのマネジメント

○リニューアルイベントの反省会は、イベントに出演した合唱団の活動拠点、TERRAホールで行った。公園のリニューアルを機に、これまで交流の少なかった、自治会や立場、年齢の異なるメンバーが集い、地域について語らう場が生まれたことも大きな成果である。反省会では、今後の使い方についての意見交換で盛り上がった。決して無理はせず地域のペースで、具体的な企画を共に考え、トライ&エラーを繰り返す中で、公園を中心にした地域の「文化」「暮らし」が育まれていこう。



宮塚公園のプロジェクトで大事にした3つのこと

①まちの小さなグリーンインフラをブランディングソースに
宮塚公園は、市の都市政策の中でブランディングエリアとして位置づけられた、お洒落な店舗や歴史的資源の多いエリアに位置する。私たちはこの都市政策を前提としながら、街路の並木空間や街区公園などの緑資源(=小さなグリーンインフラ)を、まちのブランド化の種となるブランディングソースとして位置づけた。

②公園とまちのかかわりしりとなる「際」のリ・デザイン
今回のリニューアルは、石積と低木に囲まれ閉鎖的な印象を与えていた公園とまちの境界部をオープンにしてケヤキ並木の美しい街路空間と融合させ、そこにアクティビティを誘発させるための空間・装置を組み込み、最小限の整備で市民の「かかわりしり」をどれだけ増やせるかが、テーマだった。また、意見交換会を通して把握した、同じ地域に住んでいても年齢層やライフスタイルが異なるメンバーがそれぞれの目線でイメージする5W1Hを大事に、限られた空間で実現するために、空間の使い方・機能を複合化することを提案。「使い方」からプランを説明することで、市民に具体的なイメージを持ってもらえるよう工夫した。

③小さな「芽ばえ」や「共有」を繋ぐまちのコミュニティマネジメント
プロジェクトが進む中では、立場の違いで意見が相違する場面もあった。それぞれの立場に向き合い前向きな解決を提案し、1つのリニューアルプランで合意形成に漕ぎ付けたことで、宮塚公園を中心にまちづくりを考えるプラットフォームの素地ができたと考えている。また、プロジェクトの趣旨と、公園がまちに開くという考え方は、「宮塚公園リニューアルコンセプト帖」として分かりやすく見える化した。考え方やプロセスを発信したことで、リニューアルイベントを機に新しいプレイヤーが現れ、宮塚公園の周辺エリアにある、お洒落なカフェや文化活動を外に誘いだし、融合させることができた。現在、リニューアルイベントの成功体験の共有、またはユーザーとしての体感により、まちの中に公園と一体となった暮らしへの期待感、まちへの愛着が連鎖的に芽ばえ、市民が主人公となった内なるブランドが育ちつつある。

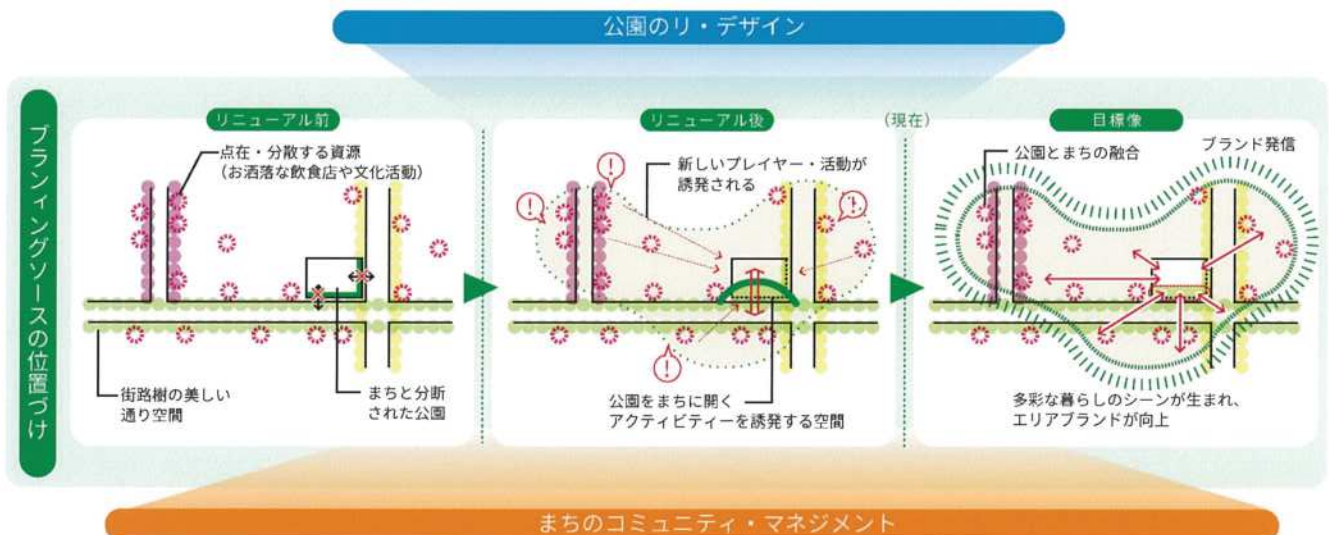
街区公園からはじまる、まちのブランドマネジメントに向けて

街区公園の小さなリニューアルをきっかけにしたプロジェクトが、シティプロモーションの根幹をなすようなまちの変化を誘発している。これは、都市政策を前提に小さなグリーンインフラを「ブランディングソース」として位置づけ、「公園のインターフェイスのリ・デザイン」と「まちのコミュニティ・マネジメント」を両輪で進めてきた成果であると。本プロジェクトを通じて生まれた「意見交換会」「活性化実行委員会」といった場合は、公園での過ごし方やまちでの暮らし方などを創造していくような、「まちのブランドマネジメント」を担う主体となるプラットフォームの芽ばえとも言える。芦屋市のシティプロモーションの目指す「憧れを、日常に」のイメージをリードする多彩なシーンが、次々と生まれる公園になることを期待したい。

まちや市民をつなげる公園の役割

文=赤澤宏樹氏(兵庫県立大学/兵庫県立人と自然の博物館)

まちの変化や価値観の多様化が著しい今日、宮塚公園はまちや市民をつなげるハブとしても期待されている。都市間競争やコンパクトシティ化が進む中で、特に若い世代の転居回数が増加する傾向にあり、それは人生において新しいコミュニティに加わる機会が増えることを意味する。若い世代が仕事帰りに公園で一息つく、子育て世代がママ友に加わる、子ども達が大人に気遣うこと無く走り回る、時間にゆとりができた世代が地域活動やサークルで活躍する場として、気軽にアクセスできる公園が活用されることが望ましい。新たに出店したカフェ・レストランや雑貨店にとっては、公園でのイベント出店によって認知度が上がり、まちに根付くことにつながるだろう。宮塚公園では、コミュニティ・マネジメントによって世代間、生活者・商業者間、新旧住民間の新たな社会的包摂を生み出し、リ・デザインによってそれを実現する場を創り出している。その結果、芦屋らしさ、このエリアらしさがランドスケープとして発現しており、今後は他施設や周辺の歩道空間などにも広がっていくことが期待される。



■リニューアルプラン

限られた空間と整備費の中で、ブランディングソースである2つの小さなグリーンインフラ(公園と街路のケヤキ並木)を融合させ、公園とまちのかかりしろとなる緑の「際」空間の中に、意見交換会で集まった利用者目線の多様な活用アイデアを空間・装置として再構築して具現化する、リ・デザインの視点を大事にした。

市民の意見に導かれた5つの方針を具現化するため、使い方の異なる3つの空間を複合化して公園とまちの接点部に組み込んだ。

①公園とまちをつなぐ象徴となる「公園テラス」

最もまちに近い際の空間では、植栽環境と施設・装置の改善により、公園をまちに開くという姿勢を表現した。まちと公園の隔たりの要因とであった低木を撤去して見通しを確保。鳴尾御影線のケヤキ並木と一体となり公園・まちを彩るサクラは継承する方針としたが、長期的な視点から、健全度調査の結果を踏まえて衰弱が著しいサクラは更新を図った。鳴尾御影線からの入口を大きく広げ、休憩施設を兼ねたデッキ階段とスロープ、街路レベルからアクセスできるデッキベンチを設け、近くの店舗でテイクアウトしてテラスに座って食べるなど、まちとの関係をつなぐ利用の創出を目指した。

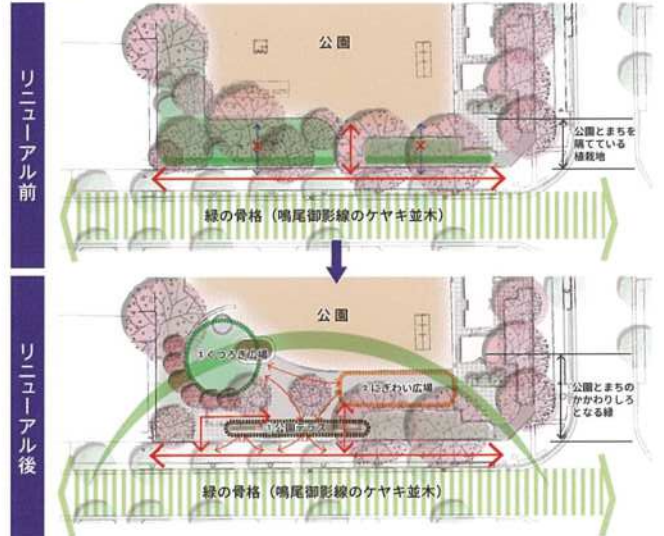
②公園からまちにしみ出す活動の舞台となる「にぎわい広場」

公園テラスの北側(交差点側)は、近隣でカフェを営む市民の意見も踏まえ、マルシェのブース設置が可能で、鳴尾御影線と一体化して通りを歩く楽しみを広げる、イベント活用可能な舗装広場とした。普段はこどもたちが舗装を活用した遊びを楽しめるよう平滑な仕上げとし、まちに向けて多様なにぎわいが生まれる場とした。

③ゆっくりと過ごせるみんなの庭となる「くつろぎ広場」

宮塚公園は、小さな子ども連れの親子や園庭を持たない保育園の利用も多く、安心して遊べる空間や子どもを見守れ日差しを遮れる休憩空間も求められていた。公園テラスの南側はやわらかい芝生広場としてウォールベンチで囲み、ブランコや土広場などアクティブな遊び空間と緩やかに領域を分け、落ち着いて憩える空間とした。

■リニューアルの考え方

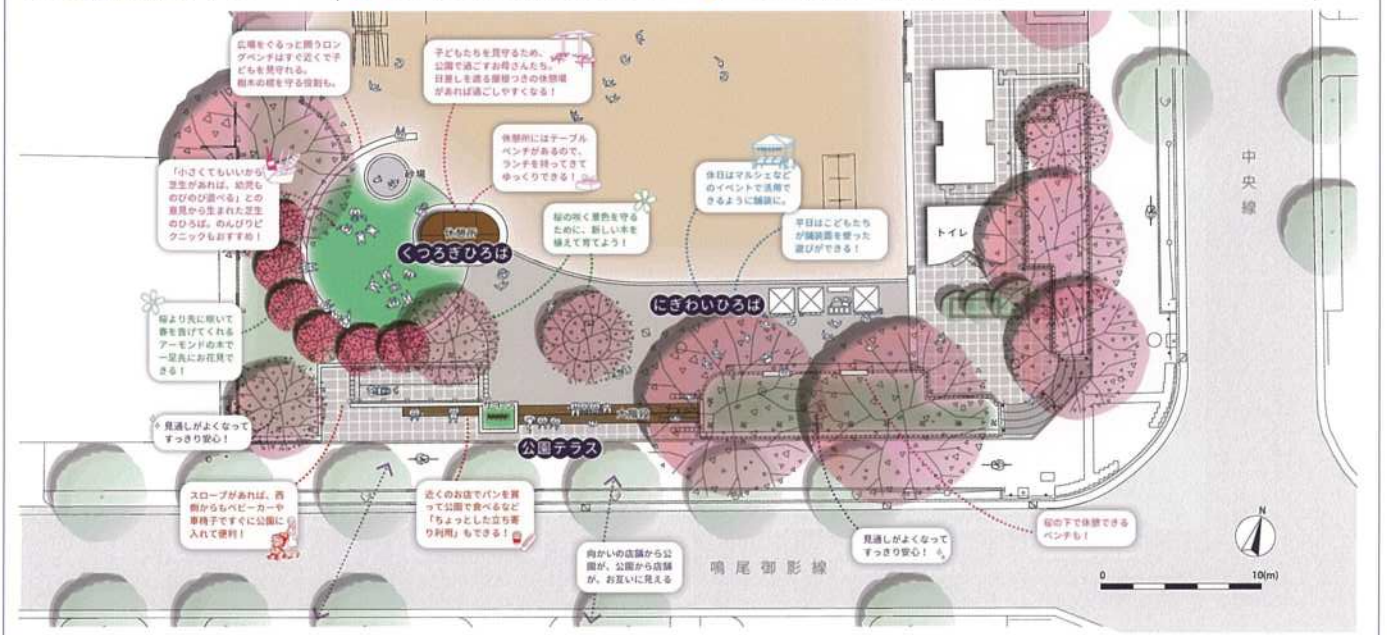


■リニューアルによる公園の変化



市民の意見交換会から生まれた5つの方針と活用アイデア

- 通りからの見通しをよくする
- 通りからアクセスしやすくする
- みどりの景観を守り育てる
- 休憩・くつろぎの場を充実させる
- イベント活用できる空間をつくる





まちとつながる

近隣の方の話では、リニューアル前に比べて利用者が大きく増えた。まちに大きく開かれた公園は、まちにすっかり浸透している



親子でくつろぐ

既存の桜が影を落とす場所に設定した砂場、ウォールベンチが見守り場所となり、親子で遊ぶ姿が日常的に見られるようになった



笑顔あふれる

まちに開かれた公園になり、子どもたちも安心して遊べる。公園テラスでおしゃべりする子どもたちの笑顔がまちを彩る。



明るい並木空間

低木を除去しすっきりとしたことで、街路樹のケヤキと公園のサクラが美しく、すばらしい空間が一層際立ってきた。



街角ミュージカル

宮塚町に拠点を持つ「青春の街合唱団」によるコーラスミュージカル「CATS IN ASHIYA」。リニューアルを機にさらに新しい交流が。



まちに広がる

近隣店舗の出店によるマルシェやステージなど、地域で考えて生み出したリニューアルイベントのにぎわいは、まちに染み出した。



ぼくらの居場所

宿題をしたりスケートボードで遊んだり…公園を使いこなす小学生。意見交換会で出された母親目線のイメージ通りの夕方の風景。

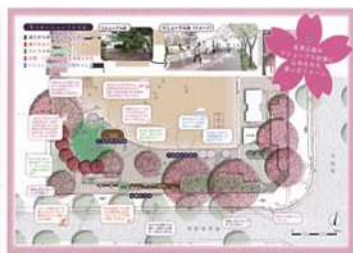


輪になるベンチ

好きな場所を選んで思い思いに過ごす人々の姿。適度な距離を保ちながらも芝生を囲んでひとつの輪になる一体感が心地よい。



市民が考えた公園像とプロセスを発信するコンセプト帖
(発行: 宮塚公園活性化実行委員会)



宮塚公園

所在地 兵庫県芦屋市宮塚町 14
所有者 芦屋市
設計 リニューアル設計 / 株式会社ヘッズ大阪
竣工 リニューアルオープン 2018年 3月
規模 公園面積 2,294㎡